



# 保二小だより

[1月号]

家庭数配布

令和7年1月8日 発行  
西東京市立保谷第二小学校

## ホニール

校長 三澤 亘潤

新聞報道をきっかけに、あるドキュメンタリー映画を見ました。日本の公立小学校での子どもたちの生活を密着撮影したもので、先行上映された海外では、異例のロングランとなりました。海外の観客が注目したのは、教室の掃除、給食の配膳、児童会活動、運動会をはじめとする学校行事など、子どもたちが役割分担をして真摯に向かう姿であり、自国の教育を見直す機会になったと評価されているとのこと。教員として細かく見ると、ごくありふれた学校生活で、ツッコミどころもあるし、この映画自体の評価も分かれると思いますが、個人的には、四季を彩る学校の営みと、そのなかで育ってゆく子どもたちの姿に、思わず涙が出ました。

今や、こうした我が国の「特別活動」は、「TOKKATSU」として世界に注目されており、エジプトでは、日本式教育導入という国家プロジェクトが動いています。答えのない予測不可能な時代にあって、幼い頃から、多様な他者と意見を交わし、議論を深め、納得解を見付けるためのヒントが、「TOKKATSU」にはあると評価されています。

さて、保二小は、子どもたちの自立的な活動を重視し、自ら考え、必要に応じて調べたり、友達と相談したりして、目標を達成する活動を重視しております。つまり、特別活動のなかでも、国語や算数などの各教科が駆使されることが理想です。だから、近年、学習発表会に改編される傾向にある学校行事を、貴重な学びの場として重視しています。

子どもたちによる自作劇も上演した一昨年の学芸会、わらべ唄を西東京市ふるさと探究学習のコアデバイスとして、昨年新設した音楽会、そして、美術をそれぞれの生活のなかに、アクティブに表現した先日の展覧会は、保護者・地域の参会者にも、その意義を理解いただいたことと思います。展覧会では、装う作品をランウェイで披露した低学年、神輿本体に格納したそれぞれの未来に願いを込めて巡行した中学年、自他の作品の鑑賞を極めて、キュレーターを務めた高学年が、展示した作品そのものの完成度を基盤としながら、躍動していたことを、嬉しく思います。

早くも、締めくくりの3学期となりました。2年生は、育ててきた野菜の収穫と販売、利益の活用をします。この活動は、3年生が2学期に試行した、室内レタス工場の活動へとつながればと思います。5年生は、起業した会社ごとに、開発したメニューの実食販売を都内各地で行います。6年生は、昨年度の金融経済プログラムの続編で、株式の学習に挑戦します。こうして、市民科の活動は、各教科等も「TOKKATSU」も併せてふところに抱え、かつてない学びのゆりかごとなっています。

年間3回予定している校内研究の大団円となる市民科の研究授業は、1年生による提案です。MUFG PARKや東大田無演習林の森林教育パートナーと連携して、ドングリなどの自然の素材を生かして、やぎさわ保育園の園児との交流を行うものです。その試行錯誤の過程で、地場の植物を活用し、ドライフラワーや香水を試作しました。「香り」に着目した太田教諭や梁川支援員の感覚を、なんだか新鮮に感じました。キンモクセイを原料にした自家製香水「ホニール（仮称）」の仕上がりはどうか、展覧会でデザイナー兼モデルを経験した子どもたちの反応に、わくわくする新学期です。